

おはなし散歩道

秋空へ響いた声

湯沢町 富樫あい子

ぼくと涼は少年野球チームに入っている。クミとナツミはマネージャーなのだ。

学校の昼休み、二人はどじな涼を囲み楽しそうに話している。

クミとナツミはいつも一緒にいる。キンギョのフンと呼ぶ、ぼくを嫌っていた。

ぼくは、机に伏せて、ひとり秋の雲を見上げていた。そして、じいちゃんのお味の俳句をまねていた。

(あいつより、イケメンなのに何故もてぬ)

野球だってぼくの方が上手いのに五、七、五と指を折っていた。

「何数えているの?」

四年生の二学期に転校してきた、まだ日の浅いミユキが給食当番から戻ってきた。

「指のストレッチさ」

話した事のないミユキに、声が裏返った。

「野球が好きなのね」

「マユ毛すれすれにそろえた前髪をミユキが手で払いながら笑った。小柄で色白でキンギョ達とは違う。」

「私、野球の事知らないの。雄太君教えて」

ドキッ、体に熱い血がかけめぐった。

「試合を見てればわかるよ」

高鳴る胸をおさえ、ぶつきら棒に答えた。

「今日、グラウンドに行っていない?」

「いいよ。あす土曜日は紅白試合があるし」

「ホント! いい思い出になるわ」

「えっ?」

ミユキの顔を見た。

「う、うん。なんにも!」

ミユキは、首をふり唇を結び、微笑んだ。

清潔感いっぱいミユキは、泥だらけになって野球ばかりしているぼくなんかになんかと思っていたが、

(やっ! いつも一緒に帰る涼をおいて、ぼくは急いで帰った。)

「ただいま!」

二階の自分の部屋にかけ込み、画用紙に野球のダイヤモンドを書いた。本墨、一墨、二墨……と守備位置を書く。ぼくはグロップと、画用紙を丸めてチームグラウンドへまっしぐらに走った。

「ミユキちゃん、まだ来ていないのか」

「がっくり!」

「はい、おやつ!」

「ならんだ。ナツミか! いらねえよ!」

「何だとは、何よ!」

「ナツミの甲高い声。キンギョみたいに、ボールが泳ぐといけないうからあかんべえをした。」

「かわいくない!」

ナツミはぼくのポケットにねじ込んだ。そこへミユキが来た。

「遅くなってごめん」

「大丈夫だよ!」

グラウンドと画用紙をみくらべながら、ぼくはポジションの説明をした。用具の名前も教えた。すると、

「雄太、練習開始!」

ナツミが意地悪そうに声を張り上げた。

「うるさい。いくよ」

ミユキに、ずっと教えていたかたのみに。

「学校でまた教える」といい残してグラウンドへ急いだ。ミユキが見ていると思うと力が入る。

翌日。

授業の前にルールの説明をした。すると、

ミユキが、いきなり校庭に連れて行った。



「お父さんの転勤で急にアメリカへ行くことになったの」

(それはないぜ!)

「わずかの間だったけど、雄太君と良い思い出が出来たわ」

何も言えないぼく、目頭が熱くなった。

ルールを書いた紙を高く投げた。

「受け取れよ!」

「オッケー!」

二人の声が秋の空へ響いた。

(挿し絵・小出 茂) (完)

高尾山物語 6

飯縄大権現降臨

絵・橋本豊治



絵

俊源大徳が十万枚護摩供を修法し終え、心身共に疲れて眠った時に、夢に見慣れない姿の尊像が降臨されました。その尊像こそが、高尾山の御本尊・飯縄大権現であると伝わっております。

飯縄大権現は五体の仏神が合わさった「五相合体」のお姿です。すなわち、後背に火焰を背負い手に剣と索を持つ姿は不動明王、嘴と翼を持つ姿は迦楼羅天、白狐に乗る姿は奈吉尼天を表し、富を授け夫婦相合をもたらず歓喜天の心を抱き、腕には宇賀神・弁財天の化身である白蛇が巻かれているという姿です。

また権現とは、「権」が「仮」ということを意味しており、本体である仏(本地)が仮の姿である神(垂迹)として現れるという、「本地垂迹説」の思想によるものです。

甘い考え
心のゆるみ
自分に向ける
厳しき目

折り折りの記 (110)

波多野 重雄

高尾山の犬蜻蛉や今朝の霧

霞も霧も自然現象的には同じである。昔は区別が全くなかったらしい。いつからか霞は春季、霧は秋季と定まったという。朝霧、夜霧は何となくまめかしい。霧雨とは霧のように降る雨を言う。

高尾山の猿園隣りに樹齢約四百五十年を超え、樹高約三十七mの八王子市指定の大樹、蜻蛉の霊杉が根を張り聳えている。今朝の霧に覆われた注連縄揺れる蜻蛉は神秘的である。

伝説によると、山道の拡張の折に盤根を切断しようとしたら、一夜で根が「蜻蛉の足」のように曲がり、道が開けたという。そこで「開運の御神木」と呼ばれるようになったとされています。

(高尾山健康登山の会々々)

秋 蝉

終勤帰宅翁

明月入宅中

親月聞鳴蝉

虫命人命空

明日死すと

街灯の蝉

夜もすがら

勤めを終へ、帰宅する翁……

明月、社宅の中に入る……

月を親、蝉の鳴くを聞く……

虫の命も人の命もはなはだ

空しきかも……

厚木市 荒井 一雄